

柏樹

題字
南 勇 会長
川口市退職校長会
会報 第14号
平成29年2月1日

「先生」を語って

パトロール

安田 正信



現役の時は、殆んど地域の方と話すことや行事等を見ることもなかった。

それが当番やロールに参加する羽目になった。参加者は、見慣れない老人の私を興味深く見ていたのだが、私がかつて教員だったと知ると俄に話が活発になった。

- ・先生は忙しすぎて子供達とゆっくり話したり、遊んだりしないらしいよ。
- ・授業以外の仕事が多いらしいけど、本末転倒ではないのかね。
- ・或る雑誌に、日本の教員は世界一勤務が長いって載ってたよ。
- ・先生は何年か経つと強制的に異動させられるけど、本当に子供のため？

・先生が地域の行事に参加してくれると子供は喜ぶんだけれどもね。

・学校の先生の仕事があまり大変だといまに先生のなり手がなくなるよ。

夜間ということもあり、参加した方の先生をめぐると話はずっと多岐にわたり留まることなく続いた。

特別私に意見を求めるのではなく、日頃の学校や教員に対する思いをぶつけ合いながらのパトロールだったが私にとっては、やや居心地が悪く、しかも改めて保護者の教育に対する強い思いを知らされた夜だった。

このような学校や教員に対する思いや願いは、この地域の方々のみではあるまい。

こういったことを単なる杞憂としておいてよいのか。

これらの声が何時どこへ届くのか。そして、何時の日に全ての保護者が安心し、信頼して学校や教員を見ることが出来るのだろうかと考えさせられた。今は遠い昔だが、現役の時代そんなに怠けて勤務した覚えはないが、保護者の学校に対する不安や不満の全てを解決出来ないまでも、もっと真摯に耳

を傾けておけばよかったと胸が痛かった。

罪滅ぼしに、今度は地域の餅つきに自主的に参加してみようか。

そうだ、地域の方が言っていた教員の記事の雑誌を読んでみよう。

白木蓮の記憶

山田 治



その校舎は、木造平屋建てであつた。コの字型に東に向いていた。両翼が教室棟で、正面は、お寺を思わせる立派な造りの玄関がある。その玄関の手前には、小さな車寄せを模した円の中に姿のいい一本の松が植えられていた。そして、ずっとその向こうの県道に面した正門には、大人の背よりも高い左右二本のがっちりとした石柱がある。

これが、私が最初に赴任した北足立郡伊奈村立小室小学校である。今から、半世紀以上も前の事であつた。当時、世の中は、六十年安保闘争で国会周辺が騒然としていた時代である。が、この村は、泰然としていたように私には思われた。校内も同様だった。

校舎のコの字型に囲まれた中庭の

ブランコの脇に、一本の木がぼつんと立っていた。ふだん全く気がつかなかったが、春先に握りこぶしくらいの清楚な白い花がいくつも咲いた。年月を経て古色蒼然とした木造の校舎を背景としたその花は実に美しかった。

私は街なかで育つたので、その白い花を咲かせる木の名前を知らなかった。クラスの子どもに訊いたら、「木蓮だよ」と誇らしげに教えてくれた。

休み時間になると、その中庭のブランコで子どもたちが遊んでいる。木造校舎と白木蓮とブランコの子どもたちが一幅の絵に仕上がっていた。

その牧歌的な風景は、後年、私の教育に対する考えの原風景となつている。小学校教育のあるべき姿が、あの木造平屋の校舎と白木蓮とブランコの子どもたち凝縮されている。極論すれば、私の初等教育に関する思考は、この原点から出発しているように思える。

この歳になつても、白木蓮の咲く季節になると、その木の下に佇んでそっと見上げる事が多い。白い花の一つひとつが上から私に何かを語りかけているような気もする。新任の頃の懐かしい人たちの声で……。それは、校長さん、同僚、校務員さん、正門前の酒屋の主人等々である。

「木蓮に 夢の様なる 小雨哉」

漱石

—ちよとこい話—

時代の動きの中から

齊藤 和雄

横浜市金沢区に、大規模研修施設「横浜研修センター」がある。

ここでは、企業の幹部研修、新人研修、研修セミナー、海外からの研修を受け入れる等、宿泊施設を整えた研修施設で、500人以上を受け入れ可能な、国内最大規模を誇る研修センターである。

現在、2016年6月3日から11月29日までの6カ月間、274名のフィリピン人介護福祉士候補者が宿泊研修をしている。日本人の介護施設における就労、研修活動に、円滑に従事できるように、日本語によるコミュニケーション能力、介護に関する知識、職場での心構え等を習得することを目的に、来日研修している。

この施設で、私は、海外からの研修生の日本語会話実践研修を支援するボランティアの一人として携わっている。海外からの研修生と、対面して感じることは、研修に積極的であることは勿論のこと、表情は明るく、極めて友好的で、人に接することに喜びを感じていることだ。

横浜研修センターは、こうした海外

からの研修事業を通して、発展途上国を始めとする諸外国の人材育成を支援すると共に、海外との関係を深め、国際経済協力を推進し、相互の経済発展と共に、友好関係の一層の増大を図ることを目的としている。

国境を越え、地球全体にかかわっていく、こうしたグローバル化が進む時代にあっては、グローバルな見方、考え方、在り方が、既に現実として必要となってきた。

国際協力を常に念頭においた研修の成果は、人材の育成や経済の発展のみならず、日本と世界各国との友好関係の増進に寄与する波及効果は、極めて大きいと考えられる。

この2、3年、海外からの観光客が急増し、観光地は勿論のこと、地方を含め、外国人と接する機会が増大している今日、この機会を有効な形で取り入れ、多様な文化の人達と共に存在し、共に生きるという、いわゆる「共存・共生」の認識を、現実を通して理解し、この認識をお互いに持ち行動で表わすことが肝要である。

インクルージョンの時代において、学校教育、家庭教育、社会教育等、あらゆる教育の場を通して、「共存・共生」の理念を育て、一般化し、実践化していく努力を、国を挙げて推進していくべきであろう。

第九の魅力

高橋 三郎

6月から練習日20回余経過し、12月の公演の日が近づいてくる。全体練習の大詰めだ。不完全だが思い切つてやるしかないと思悟を決める。

生まれて初めての「第九」のステージ。「ゲネプロ」の時から緊張が高まる。そして、本番だ。第一楽章から第三楽章まではオーケストラだけの演奏である。舞台の袖で出番を待つ。第三

楽章が終わり我々の出番である。♪ドドドドドドド♪ティンパニのローリングを合図に合唱団が一斉に立つ。合唱団にライトがあたる。バリトンのソリストがソロを力強く主題を

朗々と歌う中、『フロイデ!! フロイデ!!』声を張り上げ、抑揚も強弱もどこえやら、ただ必死で歌う。叫ぶ。指揮者が懸命にタクトを振る。オーケストラが応える。合唱団とオーケストラが怒濤のごとく渾然一体となり、あつという間のフィナーレ。「ブラボー!!」

鳴りやまない拍手、歓声。有名な指揮者とオーケストラ、プロのソリストの方々と一緒に歌い終えたんだ。充実感と満足感。同好の皆さんと一体になった感動を全身に覚えた。あれから10年余になる。

酔っ払って濁声で北国の演歌ばかり

唸っていた私が、古希を過ぎた今、毎年何回かの大きな舞台でオーケストラの下、歌っている。

「第九」を歌い続けてこられたのは、桶川市の大先輩K校長先生のお陰だ。鴻巣の市民文化センターで先生の所属している合唱団が公演するから観に来いとお誘いを戴く。正装した200名余の合唱団、オーケストラ、そして、4名のプロのソリスト。それはすばらしく、凄烈で、その迫力に感動した。今でも深い印象として強烈に残っている。

翌年、先輩から今度は合唱団への入団のお呼びがかかる。心配はつきないが、やれるだけやっただけなら辞めればいいやと、ついに入団を決めてしまった。

年末の公演までほとんど毎日曜日の午前が練習日として計画されていた。楽譜とバスのパート練習用のCDを買い求め普段の自分の稽古に努めた。楽譜には指導者の指示、ドイツ語の読み方、意味などどんどん書き込まれ汚いページとなつてしまっている。

「第九」は私のライフワークの大きなひとつとなつている。ここ数年は、10月の川越「第九の夕べ in 喜多院」。2月の東京墨田区の「国技館5000人のコンサート」に出番が待っている。

——日々雑感——

達成感を求めて

宇多川正博

私が山に登り始めたのは大学生の時である。当時は山にガムシヤラに登り、年間山行日数は60日を越えていた。最近山ガールなども出現し、登山ブームにもなっているが山登りの魅力は今も昔も変わらないものなのだろう。私のこの山登りは就職により出来なくなつてしまい再び登るようになったのは還暦を過ぎてからである。同伴は山歩きなど全くしたことのない妻であった。二人で北・南アルプスをはじめ、上越、東北、北海道などの山に登ってきた。明確な目標を掲げこれをやり終えたときの達成感を味わう、これは最大の喜びである。今でも山に行くたびに絶景に圧倒され、可愛らしい花々に心を癒される、そんな贅沢な山行が続いている。山の情報はユーチューブやフェイスブックを中心にネットを通して得て、日程はネットの天気情報とぎりぎりまで睨めっこして決めている。そのおかげで山に行く前に既に頭の中では登山のシミュレーションが出来上がっている。最近のソーシャルメディアの普及はすごい。私は今フェイスブックで山のグループにも入り情報を交換しているが大勢の山仲間と情報を共有することを楽しんでいる。このグループは非公開グ

ープである。フェイスブックは原則実名登録であり、居住地や生年月日などが公開される場合もあるが非公開グループは会員以外は覗けないようになっている。最近では旧友や教え子などから突然の連絡が入ってくることもあり大変懐かしくうれしく思うことがある。どこでどう繋がっているのかこれがSNS社会の特性であろう。退職校長会でもこのSNSを会員のコミュニケーションを図るツールとして利用できたのインターネットの利用率は拡大傾向にあるという。それは通信と放送の融合がますます進化しネット社会がより身近なものになってきたからである。今の子どものネット社会、SNSが普及した環境にいる。学校では子ども達の実態に合わせて教育や周知啓発を行っていくことが喫緊の課題であろう。それにはまず私たちがこのような社会にかかわりを持ちながら生き生きと生活していくことこそが大切だと思っている。



最悪の体調の中も、

つい「看板は生徒です。」と言った

村上博俊

新任で赴任し、定年で退職した仲町中学校。この粹な人事で私は、人生意気に感じ、今生かして頂いている。

63歳の現在、恩返しにの気持ちで川口市教育研究所に勤務し、土日は自宅で陶芸教室のまねごと、その合間に日曜大工、創作活動、毎日ホームページを更新している。

さて、定年まで2年というところで陥った体調不良。腰痛。激痛もあり、椎間板ヘルニアと腰椎すべり症で腰が全く伸びなくなっていた。田んぼのあぜ道を腰の曲がった老人が歩いている情景が頭に浮かび、その通りの自分自身の姿に愕然とした。

ポルト4本で背骨を固定する手術を行う冬休みまでの3ヶ月間、苦痛を堪え皆勤で学校に通い、出張にも出かけた。あるときは美術教育連盟として秩父の「郷土を描く美術展」、身体障害者福祉のための「美術展」の審査や表彰式での挨拶。所沢で行われた造形教育関東ブロック大会・・・と腰が曲がったまま出向き、挨拶。行く場所、行く場所、懐かしい面々からも、「どうしたんですか。村上先生ですよ。ね。あら・・・。」と、悲鳴にも似た声が

あまりにも多く、次のように挨拶を切り出した。

「つい看板は、と言ってしまうので、ツイカンバンをやらせてしまったのかも知れません。かんばんは！」

仲町中に於いては、職員・生徒・保護者・地域の方々のご協力を得て、学校に出勤すると誰かがそばに来て手を差し伸べ校長室まで手荷物を運び、靴をしまい上履きまで準備していただいたり、朝礼では校長室から体育館まで生徒や職員が連れ添ってくれ、体育館に着くと自然に椅子が用意されていた。万が一、椅子が無いときも躊躇無く生徒が全力で椅子を用意してくれる姿が胸を打った。

いよいよ入院と言うときは全校でサプライズの「校長の入院を励ます会」が開かれた。生徒全員のコメント入りノート。「腰にポルトを入れたら陸上のポルトみたいになって戻ってきてください。」「校長がいない間、ぼくが看板になって仲中を守ります。」「誰もがウィットやユーモアが効いていた。これらのコメントは病室に飾られ同室の病人や看護師さんたちを楽しませた。

「仲中っていったいどんな学校ですか。すごいですねえ」

入院したのは、学区内の済生会病院。しばらくこの病室が特設の校長室と化し、生徒・保護者・職員が来てくれては地域連携の拠点となった。

学校保健教育の取組

文部科学大臣表彰を受賞して

川口市立木曾呂小学校

校長 岩本好則

本校は、学校保健の分野で平成27年度文部科学大臣表彰を受賞しました。ここに、本校の取組の概要とその成果を紹介し、今後の課題を述べさせていただきます。

《取組の概要》

1 系統性を重視した歯・口の健康づくり

○各学年・学級での歯科保健指導の実施

○個別のブラッシング指導の実施

○家庭との連携

○児童保健委員会の活動

2 家庭・地域と連携した望ましい生活習慣づくり

○学校保健委員会の充実

○校内研修と連携した取組

○ノーマディ

アの取組

3 保健掲示物の充実

○毎月の保健

目標に合わせた掲示

○季節に応じ

○季節に応じ



た揭示

○心の健康につながる揭示

4 その他の取組

○望ましい食習慣の確立

○学校安全等の推進

○基礎的・基本的な体力向上を目指した体育授業の充実

《成果と課題》

学校・家庭・地域が一体となって健康教育を推進していくことで、学校取組に対する理解・協力体制も充実し、児童・保護者の健康教育に対する意識が今まで以上に高まっています。

歯科保健では、定期的な歯科指導や全教職員の共通理解にたつた指導を継続したことで、むし歯のある児童の割合が平成25年度から26年度で、5ポイント減少しました。生活習慣では、朝食の摂取率が98%を超えるようになりました。就寝・起床時刻については、達成率が上がるよう継続した指導をしていく必要があります。

今後は、取組の成果と課題を整理し、見直しを図りながら、学校・家庭・地域がより一体となった活動、「地域学校保健委員会」の充実を図り、健康教育を推進してまいります。最後になりますが、今回の受賞は、本校元校長先生が種を蒔き、前校長先生が水をやり育てていただいたおかげであると感謝しております。

「地域と共に歩む」

優良PTA文部科学大臣表彰を受賞して

川口市立神根東小学校

校長 日根野 真

本校は、この度優良PTA文部科学大臣表彰を受賞することができました。この場をお借りして多くの諸先輩方に御礼申し上げます。

本校は、これまでもPTAや学校応援団が、中心となって、様々な活動を行ってきましたが、本校独自のいえるものを二つ述べさせていただきます。

1 四者合同会議について

本校の周辺には大きな幹線道路がいくつも走っています。ですから何より大切なことは、登下校の安全です。

過去に大きな事故があったこともあり、毎年、夏季休業前に、学校・家庭・地域そして行政の四者が集まって会議を行います。

学校側からは、管理職と安全担当が、保護者側からは会長と執行部、地区運営委員が参加します。

地域の代表は、各町会長・民生委員・主任児童委員・子供会等の方々。

行政側からは、教育委員会・県警・県土木整備事務所・市交通安全対策課・道路維持課等の関連機関です。

会議では、保護者側から、通学路付

近の危険箇所等を説明します。

会議の中で、すぐにでも取り組めそうな案件と、時間をかけて行う案件等に分け、それぞれが持ち帰って検討していただくことになっています。

2 学校ファームでの米作り

もう一つの特徴が敷地内にある田んぼでの米作りです。保護者で農家の方が、本校の敷地に立派な田んぼを作って下さいました。その方のご指導のもと、本格的な米作りの学習ができるようになったのです。校地内にあるので、子供達による手入れや管理がしやすく、継続して学習ができます。

収穫した米は、自分たちだけでなく、いつもお世話になっている方にお裾分けをしています。米作りを通して優しい心も育って欲しいと願っています。

地域と共に歩んできたからこそ現在の神根東小があります。今回の受賞は、地域・保護者の努力の賜物です。

編集後記

大変お忙しい中、玉稿をお寄せいただきありがとうございます。

65〜74歳は社会の支え手という提言があり、准高齢者に格下げ?…: 気をとりなしておして、出来る所で社会の支え手としてもうひと頑張りというところでしょうか。(野島邦彦)